

瓶史國字解

暑

79  
4063  
2



瓶史國字解卷之二



棟雲齋 桐谷鳥習 註解



三器具

瓶花瓶亦須精良譬  
如玉環飛夢不可置  
之茅茨又如嵇阮賀  
李不可請之酒食店  
中

三器具

瓶花瓶亦須精良譬  
如玉環飛夢不可置  
之茅茨又如嵇阮賀  
李不可請之酒食店  
中

器具とハ花を挿る瓶器の美意を指し佳物を揚て録するをいふなり。○  
美花瓶亦須精良とハ器花とハ花を挿ることをいふ水とハ花を挿る器なり瓶  
ハ瓶器とハその花を挿る器なり美花瓶亦須精良とハ美花瓶とハ美花瓶とハ  
二度刻ありは子かへりてべくと須精良とハ美花瓶とハ美花瓶とハ美花瓶とハ  
美花瓶とハ美花瓶とハ美花瓶とハ美花瓶とハ美花瓶とハ美花瓶とハ美花瓶とハ

u57295

精良ものを擲てもちゆべしと云ふことあり。譬也。玉環飛燕不可置之茅茨。二玉環といふ唐の揚貴妃の字あり。即揚貴妃のこと。飛燕といふ漢の成帝の皇后。三子入の中の人あり。茅茨といふ菅葺の棧。き家のことあり。又也。既既賀李不可。清之酒合店中。二八愁八音の竹井七賢の一人。き七賢の一人。既既賀李といふ人あり。既既賀李といふ唐の李白といふ人のことあり。酒合店中。二酒音あり。賣も店あり。酒の賣酒屋料理茶屋などのことあり。請すとハ精對する。人を呼ぶて馳をす。る。ことあり。是云意ハ花を挿。素小瓶器亦須。精良なるべく随分勝れて。好き瓶器を挿て挿べしとあり。凡俗ある器。雅正の上花ハ挿べり。ハ玉環飛燕などの様も美人を萱葺などの茅茨の棧。き葛家などハ置。り。さる。又也。唐既既賀李。李白等の好き賢徳ある風流入ハ精對する。清浄潔白の風雅なる聖教を設けて。請すべきこと。賣。賣屋料理茶屋などの舟棧のい。き凡俗の店。ハ請すべし。き。好し。ことあり。花も亦也。斯好上花。珍花等ハ。果き。小品の器ハ。挿。す。此未出。る。金屋。出。堂。も。も。ふ。き。上品の良器。挿。べき。ことあり。是。真。子。花。を。寵。愛。す。る。こ。の。本。情。と。い。ふ。べき。あり。

嘗見江南人家所藏  
 舊觥青翠入骨砂班垓  
 其可謂花之金屋其次  
 官哥象定等窰細媚  
 滋潤皆花神之精舍也

嘗見江南人家所藏舊觥青翠  
 入骨砂班垓起可謂花之金屋  
 其次官哥象定等窰細媚滋潤  
 皆花神之精舍也

嘗見江南人家所藏舊觥。二觥とハ膏とハむ。う。といふこと。前。舊。と。いふ。こと。あり。江南。の。處。の。名。これ。ハ。舊。二。日。本。まで。南。海。道。まで。い。ふ。が。こ。こ。江。の。南。の。國。と。いふ。こと。あり。人家。と。ハ。其。江。の。南。の。國。子。住。人。の。家。こと。あり。所。藏。と。ハ。其。家。子。持。傳。て。重。寶。す。る。と。いふ。こと。舊。觥。と。ハ。舊。ハ。ふる。き。こと。觥。ハ。か。の。有。花。瓶。より。上。右。ハ。酒。と。入。る。器。を。花。瓶。と。成。し。て。用。ふ。もの。多。し。是。も。元。酒。と。い。れ。る。もの。と。見。ゆ。り。青。翠。入。骨。砂。班。垓。起。可。謂。花。之。金。屋。と。ハ。青。翠。と。ハ。青。く。翠。あり。といふ。こと。入。骨。と。ハ。其。青。翠。の。色。が。あ。ん。ま。や。透。垣。て。こ。ゆ。る。と。いふ。こと。あり。因。る。骨。又。入。る。ハ。い。は。れ。り。あり。砂。班。垓。起。と。ハ。砂。ハ。す。ま。班。ハ。ま。垓。と。い。ふ。こと。起。と。ハ。起。す。こと。あり。其。青。翠。の。器。ハ。砂。の。様。を。の。が。班。と。い。ふ。こと。起。と。ハ。い。は。れ。り。あり。砂。と。い。ふ。こと。あり。金。屋。と。ハ。屋。ハ。い。と。刻。字。と。い。ふ。こと。あり。

結構ある普請の家といふ義あり、總而皆花を養入り、その花瓶を  
 其家子とてし、その子斯くあり、此花瓶古物より青翠の色老人まで  
 透瑤り炊の様あるもの、班子つきふくれ、たきわたりて、甚だ雅な風流の結  
 構あるものと見、その中郎先生、むり見られて、好き物と思われ、ると思ひ  
 出し、茲に記され、るあり、因之花の金屋と謂、了と書れ、るあり、其  
 次官寄家定、等密細媚滋潤、皆花神之精舍也、とハ室寄家定  
 にもハ陶器の名あり、五代の五は始る密も、焼物の徳名あり、後といふも  
 水子、こゝろあり、細媚滋潤、ハ細媚ハきめこま、うま、美しきといふ、こゝろ滋潤ハ  
 まつ、こゝろと、潤あり、膏を引、るや、うま、光澤のあるをいふ、あり、花神ハ花  
 の霊といふ、こゝろと、名を称志を指して、いふあり、精舍ハ元學問所のこ  
 とあり、及、立寺院、經讀の室等の、こゝろ用て、より、今ハ、ありて、寺院の事ハ用  
 いたれ、學問をこゝろする所の家、居り、多、るあり、前子家、上好き花器を  
 金屋といひて、結構ある家子とて、其、次ハ精舍、ま、ご、こゝろ、るあり、因、而、官  
 寄家定の密の細媚滋潤、より、皆花神の花の、ごめ、ハ精舍ともいふ  
 べき、せの、あり、此花瓶ハ、中郎先生の、所持せられ、ると思、こゝろ

### 大抵齋瓶宜小而矮

### 大抵齋瓶宜小而矮銅器如花

銅器如花瓶銅觶尊  
 壘方漢壺素温壺匾  
 壺密器如紙槌鸞頸  
 茄袋花樽花囊著艸  
 茹槌皆須形製减小  
 者方入清供

觶銅觶尊壘方漢壺素温壺匾  
 壺密器如紙槌鸞頸茄袋花樽  
 花囊著艸茹槌皆須形製减小  
 者方入清供

其花を挿る望敷のことと、ふかり瓶ハ、を、い、け、の、こ、と、後、有、る、と、ハ、い、わ、く、俵  
 といふ字、子、大抵、書齋、中、子、花を挿る瓶器ハ、あり、矮、く、り、俵、く、り、と、あ、が、  
 宜とあり、○銅器、ハ、花瓶、銅觶、尊、壘、方、漢、壺、素、温、壺、匾、と、ハ、銅  
 器、と、ハ、か、ら、う、ね、の、瓶器、といふ、こゝろ、あり、此、六、品、皆、か、ね、の、花、瓶、の、形、の、名、あり  
 ○密器、ハ、紙、槌、鸞、頸、茄、袋、花、樽、花、囊、著、艸、茹、槌、と、ハ、密器、と、ハ、焼物の  
 花瓶の、こゝろ、あり、密ハ、焼物の、名、あり、此、七、品、皆、焼物の、花、器、の、形、あり  
 ○梨雲、多、先生、此、瓶、史、中、子、出、る、是、瓶、の、形、を、圖、し、て、亦、六、徑、及、諸、傳、記  
 子、出、る、所、の、花、瓶、或、ハ、樽、右、圖、等、子、出、る、白、苔、尊、壺、の、形、其、奇、此、花、器、と  
 有、る、べき、もの、を、取、り、録、し、て、編、冊、と、て、花、器、圖、苑、と、名、け、り、家、蔵、し、て、門、人

枕心の者、これを後く又和朝の風、子慕て新観、子竹、筒、墨を被て  
挿花、子便理、有る形を悉く、因て亦花臺、垂、掛、懸、板、釣、瓶、等、の挿  
花、子用、き、器具の圖寸法、等、悉く、あら、う、これ、を、續、花、器、圖、苑、と、名、け、  
梨、雲、等、の、家、藏、と、名、け、門、生、枕、心、の、者、ハ、挿、け、與、る、あり  
○皆、類、形、製、減、小、者、方、入、法、供、と、ハ、須、と、ハ、ま、つ、と、ち、ゆ、る、と、ハ、義、之  
此、字、二、及、子、ん、で、す、く、く、後、ま、う、り、て、一、と、よ、か、あり、法、供、子、入、一、あり、形  
制、と、ハ、形、の、造、一、と、よ、こ、こ、あり、減、小、者、と、ハ、小、燈、き、の、を、ハ、是、皆、前  
子、と、ぬ、く、花、器、ハ、一、の、低、く、小、燈、を、佳、と、する、所、あり、方、子、ハ、さ、る、と、漬、む  
字、あり、さ、る、子、清、供、子、入、一、と、よ、義、あり、清、供、と、ハ、清、ハ、き、子、一、す、び、  
訓、字、マ、清、潔、の、義、あり、供、ハ、そ、あ、ふ、さ、く、と、釋、字、マ、云、意、ハ、大、抵、花、瓶  
ハ、皆、類、く、形、製、と、け、低、く、矮、く、一、と、小、燈、の、を、用、る、方、子、さ、る、子、清、潔、の  
供、子、そ、あ、入、る、一、と、あり、せ、い、高、く、大、長、も、の、ハ、甚、一、き、と、よ、こ、こ、あり

不然與家堂香火何異  
雖舊亦俗也然花形自  
有大小如牡丹芍藥蓮  
花形質既大不在此限

不然與家堂香火何異雖舊亦  
俗也然花形自有大小如牡丹  
芍藥蓮花形質既大不在此限

不然與家堂香火何異雖舊亦俗也、ハ、本、也、ハ、前、子、云、ぬ、く、花、瓶  
ハ、燈、小、く、さ、ん、バ、い、ふ、こ、と、あり、家、堂、ハ、家、の、内、子、神、仏、を、祭、る、こ、れ、と、家  
堂、と、い、ふ、此、邦、の、持、佛、ハ、檀、を、と、よ、の、數、あり、火、と、ハ、其、神、佛、の、前、子、備  
物、色、く、有、る、中、子、も、多、燈、を、身、一、と、する、あり、花、瓶、の、と、け、低、く、矮、小、く、さ、ん、  
其、身、燈、と、何、を、多、か、人、何、の、美、る、こ、と、さ、き、と、よ、こ、こ、あり、又、堂、塔、の、前、子  
淨、土、盤、と、い、大、なる、身、燈、を、置、て、株、ま、を、捨、る、もの、あり、是、等、の、類、も、あり  
今、此、邦、も、て、も、青、磁、の、花、瓶、或、ハ、か、ね、か、た、も、多、く、佛、前、め、き、さ、る、もの、あり  
こ、れ、を、嫌、あり、因、て、花、瓶、ハ、矮、小、く、せ、い、の、低、き、もの、を、佳、と、す、大、長、み、し、て  
せ、い、の、高、き、もの、ハ、種、舊、亦、俗、也、舊、と、ハ、古、物、の、一、と、舊、物、あり、こ、も、亦、俗、  
一、と、鼻、く、宜、ら、ず、と、あり、○然、花、形、自、有、大、小、如、牡丹、芍、藥、蓮、花、形、質  
既、大、不、在、此、限、と、ハ、然、花、形、ハ、花、の、形、自、大、き、さ、る、もの、小、き、もの、あり、と、あり  
形、質、ハ、花、の、か、こ、ち、の、生、れ、つ、き、と、い、ふ、こ、と、あり、人、の、氣、質、と、い、ふ、は、か、き、  
り、と、い、ふ、字、あり、是、前、子、云、ぬ、く、花、瓶、ハ、低、く、矮、小、と、佳、と、す、と、い、ふ、こ、も、然、花、形、自  
大、小、有、て、牡丹、芍、藥、蓮、花、の、め、き、もの、花、の、形、質、の、生、れ、つ、き、矮、子、大、き、け、れ、  
此、限、子、在、す、矮、小、き、器、さ、り、子、ハ、限、る、一、と、其、花、子、因、て、廣、大、さ、る、も、用、き、こ、と、あり

嘗聞古銅器入土年  
嘗聞古銅器入土年久受土氣深

久受土氣深用以養  
花花色鮮明如枝頭  
開速而謝遲就瓶結  
實陶器亦然

用以養花花色鮮明如枝頭開  
速而謝遲就瓶結實陶器亦然

花を鮮明とハ其土質とハ前蓋きく木くといふことあり右銅器とハ右物の唐  
銅の花瓶とよふことあり入土年久受土氣深とハ右き唐銅の花瓶と  
いつの頃よりも知れず出中子年久く埋むるを掘出したるハ土の氣を受る  
こと深とあり○用ハ養花花色鮮明とハ用ハ其土質より掘出し  
たる花瓶を用ハ養花其花瓶子花を養輝れハと云ふこと花色ハ花の色  
光澤といふこと鮮明とハ其色艶のあきやう子艶しく光澤を来し光輝を  
養するのこちあり○出枝既再速而謝遲就瓶結實とハ枝既ハ  
多のこちありといふこと地子養むる時の條先のことあり謝するこ遅くとハ  
謝するといふゆるさるといふことあり花の志不之落るといふことあり  
瓶のちあり養を結ぶことといふことあり  
○此大意ハ其固前蓋きく古き唐銅の瓶器出中子年久  
けれハ土氣を受ると云ふ事深しこれを用ハ花を挿るは花の色艶鮮

明と瓶しく光輝を養し枝既地子と云ふ事時のぬく梢の蒼までも開くこと  
速しして謝不之落ると云ふこと一統瓶まで養を結ぶぬきと箇挿ハ土氣を  
深く含するハ陶器も亦たありとあり○陶器亦然とハ陶器ハすものこよ  
字まで燒物のことあり磁密の花瓶も出中子久く埋り在ハ亦然とあり  
○爰は手前蓋試之様と云ふことあり上野國信濃國遠火雨塚とよ  
ものあり是ハ佛流は往古神代の頂火の雨降ける程は人民穴を堀て出  
中を家とかりて住しとあり其佛塚のぬきかりて今子錢りて在り田の畔畑  
の邊をとり折て堀崩すことあり其中より色々の器物出るされども本  
て造りたるもの又金物彩ハ皆腐りて形もなき唯陶物より錢りてありさ  
れどもぬく輝けて用立終るとまざる無礎のものあり手土州子知人ありて無礎  
の物をひら貫ひ滑り形陶利のぬきよりしてひらく口廣きものありきや  
き焼ありといふ固ハ花瓶とせり然るも本も草までも志不れそく既  
粘んとするものを此器も挿置るも子忽蘇りて性勢を来し其勢地ハ出  
しとるこく枝條の蒼までも次身は長ち用て養を結ぶこと滅奇器と  
云ふこと久敷秘藏して空右は瓶しく今世瓶史は子所の器出中子久く出  
氣を受ると深きもの花を養は妙ありといふことを視て我ハ上州より  
得たる器の花をより養と思ひ念發明て感せしあり

故知瓶之寶古者非獨以翫然寒微之士無從致此但得宣成等密磁瓶各一二枚亦可謂乞兒暴富也

故知瓶之寶古者非獨以翫然寒微之士無從致此但得宣成等密磁瓶各一二枚亦可謂乞兒暴富也

及知瓶之寶古者非獨以翫然寒微之士無從致此但得宣成等密磁瓶各一二枚亦可謂乞兒暴富也  
吾以知瓶之寶古者非獨以翫然寒微之士無從致此但得宣成等密磁瓶各一二枚亦可謂乞兒暴富也  
夫非不花の養ふこゝろ大なる蓋有こゝろを和らうとあり然多水之士ハ  
寒ハ前にも出ぬく貧なり昇候なり淑ハうすうかりやせむかり士君こと  
と指てふ吾流汝此ハ吾等が様子を貧もやせむる後さうすうなるもの  
ハふふある古物の能き花瓶を求め得るこゝろあらず此を汝求べきよりこゝろ  
あつとといひこゝろあり但得宣成等密磁瓶各一二枚亦可謂乞  
兒暴富也ハ宣成等の密ハ宣成といふ磁器の花瓶あり成蓋こ  
れハ磁器の花瓶あり密ハ前にも出ぬく磁物の惣名あり磁瓶ハ磁  
ハ薬をうけて焼くる磁物則青磁とこれあり各一二枚を得るとハ枚字

中兼てハ何れ限ず物を負ふ辞也一二といふことを一枚二枚といふあり乞  
兒ハ乞食のこゝろをいふあり  
○是前にも花を養ふ瓶器須精良あるべく上花ハ別して古雅まで  
能き器を挿へ依ら花の姿屋といふべき瓶器官弁象定等の精  
舎とも出べき名器の古雅あるものを携て用べし凡俗のものハ用べ  
らずとあり此古き物を好む教へ見圓の善なりと好みても亦舊き  
器ハ花の水揚く花の保ちもよくて花を養ふ大ハ蓋あるこゝ前案  
ハ書著るこゝろ然も昔等が様子を寒微の昇候きうすうあるものハ  
方候ある寶ともあるべき古物の上品の瓶器を求め汝ハ流さし依ら但  
宣蓋や成蓋等の密の花瓶或ハ磁瓶の薬をうける青磁瓶の密の  
花瓶等ひとふらふりと得るも亦乞兒の暴富と謂べしとありこれハ花  
を取ると同一こととす大候も求むべき花瓶を多理も求め得んとすハ  
吾が各限も多せず却て本風流よりてまうくす人情欲ハ限の  
あきものかれハ但密磁の瓶器まで一二枚を得るとも乞兒の暴  
富と謂べしとありこれまで事ハ返りぬべしこれ則風流の骨髄あり  
と志るべし此瓶史中著す所の教への瓶器を三子皆古雅と  
して形様ふきものあり按て背の寫きもの形の長大あるものハ皆く

俗ありて花のうつり悪く意こりとも俗なれば昇く尚又金泥をちりめ  
花盛あるもの其俗ありて殊に花のうつり悪く花神の悪むべき者あり  
金銀を廻して銅鐵を崇ハ雅正あり密核の別ハ別ハ雅正深く花  
うほりもよく水揚もよく花の保も好きものあり挿花を好もの専風雅の  
意を失はず最花の性命を延る養方專要なるべきあり

冬花宜用錫管北地  
天寒凍氷能裂銅不  
獨磁也水中投硫黃  
數錢亦得

冬花宜用錫管北地天寒凍氷  
能裂銅不獨磁也水中投硫黃  
數錢亦得

冬花宜用錫管とハ冬花ハ冬の花あり錫管ハ錫の管あり錫にて  
捲る入筒ありこれハ冬日花を挿ておく時水は氷がそりて寒氣強  
ければ花瓶氷のこめ凍裂るなり故に子き花瓶ハ錫を以て管を捲く  
入て用べしとあり錫ハ元來うね性相柔なるゆへ是より更筒を入ぐ  
時ハ何程凍張つても凍裂るこたあし如斯する時ハ花瓶のこむことあり  
○北地天寒凍氷能裂銅不獨磁也とハ北地ハ即北京のことあり

中郎先生居られざる所あり即北國故寒氣酷く故に天寒と云い  
あり凍氷ハ凍ハ凍ハ凍と釋氷ハこるると訓能裂銅とハ銅ハ銅の花  
瓶のこと北地天氣寒嚴しく水凍氷瓶の花瓶も凍破氷裂とあり  
不獨磁と磁ハ磁物あり磁而密の器なりハ少氷も破易きものかれも  
寒氣烈敷凍氷強故密物なりてなくを洞までも能裂破るしあり  
獨ハ密よりてなくといふこと故に錫の内管を用ひよとあり○水中投  
硫黃數錢亦得とありハ水の中子硫黃を入れハ氷ぬものなりといふことあり  
凍氷敷く花瓶の水氷凍破裂るゆへ其水中に硫黃數錢を投する  
ことを亦得とありとあり數錢とハ一錢因といハ一錢のこと數錢ハ何れも其  
水中へ少量を名けて同くをいふことあり投するといハ投げ入れると  
いふことあり水の張ぬ候に水中に硫黃を入ることも亦得とあり  
○これハ北京をより日本まで山道き團子てハ冬花を挿て夜中  
に玉れハ水一圓の水とあり挿て時ハ花瓶を破ることもあり武州多摩  
郡西山附近より相州大山道同州津久井縣あり玉れハ花瓶の花瓶  
といふこと凍裂ること予度に見ざる所ありきて竹影密核の者等ハ程交  
り玉れを以て觀る時ハ越後國信濃國等の寒國子ハ玉れハ凍裂る  
ことあるべしと思ひ錫管を用ひ或ハ水中に硫黃を投て誤ることあるべし



四擇水

京師西山碧雲寺水  
裂帛湖水龍王堂水  
皆可用一入高粱橋  
便為濁品凡瓶水須  
經風日者

四擇水

京師西山碧雲寺水  
裂帛湖水  
皆可用一入高粱橋  
便為濁品凡瓶水須  
經風日者

を擇むといふことあり京師西山碧雲寺水裂帛湖水龍王堂水皆  
可用一入高粱橋便為濁品凡瓶水須經風日者  
子若多寺といふ寺あり其寺在在所の水あり裂帛湖ハ湖水龍王堂  
ハ地名此之所の水身一の名水と見たり。一入高粱橋便為濁品とハ  
高深橋といふ橋の名あり此橋諸方より川と合会所子懸ておる橋と  
つり其橋下より水と流る時ハ便為濁品と見たり。凡瓶水須經風日者  
合の所水玉れば忽濁水と成るといふことあり。花を揮ち水ハ風日と極者  
とハ凡瓶水とハ花瓶一入の水といふことあり。花を揮ち水ハ風日と極者  
須るなり風日を極るとハ遠くより流るて毎々風日とあり。

流水をいふなり譬ハ日本までも武蔵國多摩川とての水ハ彼風日を極者  
子て極品の名水なり井戸の水ハ河津能き源接井までも其水ハ花を  
養ふハよろしうらす免角子流水風日を極者を用へきあり

其他如桑園水満井水沙窩水  
王媽媽井水味雖甘艱花多不  
茂苦水尤忌以味特鹹

其他如桑園水満井水沙窩水王媽媽井水味雖甘艱花多不  
茂苦水尤忌以味特鹹  
其水必桑園水満井水沙窩水王媽媽井水味雖甘艱花多不茂  
若水尤忌以味特鹹とハ其他とハ其外といふことあり桑園水ハ桑  
園といふ園の名あり其園中子在所の水あり満井王媽媽井ハ桑園  
井戸の名沙窩ハ地名なり此四所の水の味ハ味甘と雖花を養ふ多ハ  
不茂茂せずとハ繁茂すといふことあり此四所の水の味ハ味甘といふも  
井水及水勢より風日を極者子非ざるゆへ水意く花を養ふ多ハ茂す  
子ありとすことあり尤忌若水若水ハ多き水其若き水ハ鹹氣を持もの之  
故に味特鹹を以てありといふことあり鹹ハ去不ゆきといふ字あり用へきす

未若多貯梅水為佳  
貯水之法初入甕時  
以燒熱煤土一塊投  
之經年不壞不獨艱  
花亦可烹茶

未若多貯梅水為佳貯水之法  
初入甕時以燒熱煤土一塊投之  
經年不壞不獨艱花亦可烹茶

ついでに細霏き雨連日降をいふ其雨水を梅水といふなり雨ハいつまでも降  
多れども此梅水の言ハ木の芽ふたれて善茶と成り總て草木長育の時  
かれハ草木を育てるの雨なり故に此雨水ハ花を養ふの身一因而け水  
を多く貯ると為佳不若とあり佳ハよくとするといふことあり不若とハ  
前子去川水をいふ名水ありといふも梅中の雨水子勝る者ハなきと  
故に梅水を多く貯置て花を養ふ一といふことなり○貯水之法初  
入甕時以燒熱煤土一塊投之經年不壞ハ其梅水を貯る子  
其傳置けハ水腐て性を失ふなり因ふ水を貯る法を著て後述する  
初入甕時ハ甕ハかめのことなり初甕子入る時暖熱せる煤土ハ燒ハ  
わけるといふ字熱ハあつといふ字煤土ハ甕のやけとあり一塊といふはひと

りまるといふ事投之ハ其甕の中一投入て置といふことなり經年とハ  
年を越して久し〜何年置てもいふこと不壞とハくさ〜ぬといふ事あり  
是ハ其梅水を貯る子初甕子入る時煤土の甕の土の能焼て熱〜  
蒸存子あり〜と一塊投入ておけハ何年置ても越ても壞す〜とぬ〜  
いふことありこれ水を貯るの法なり○不獨異ハ花亦可烹茶とい  
け水を貯置けハ獨り花を養ふなり亦茶を烹て甚佳といふこ  
ちり勿論甕中の燻出ハ煤土といふ藥種も困るものなり  
此章を擇水といふこと前子も去ぬ〜擇ハ〜と〜といふ字にて水を擇む  
ことあり中多してハ挿花子限す後ら一切水を悉く吟味することあり  
何の國も清麗の水ハ多なきものなり然るも水ハ食物一切何の因  
も晝夜を多る〜と〜用を為すもの故能く擇すハ育つらざる茶  
子合ぬ水多きものなり或ハ水の性宜くぬ者あり別ハ挿花ハ花を離  
水をりの養を多て勢力豔光を散すものかれ能く吟味す〜とあり  
五宜稱  
挿花不可太繁亦不  
可太瘦多不過二種

五宜稱  
挿花不可太繁亦不可太瘦多

三種高低疎密如画  
苑布置方妙

不過二種三種高低疎密如画  
苑布置方妙

宜ハおろしきといふ字あり、ふりき子孫といふこと花を挿しおろしき加減あり其加減能き作り挿しおろしきを宜孫といひしあり。挿し花不可太繁一亦不可太瘦多不返三種三種ハ花を挿するハ太繁へずハ五色も七色も一瓶子挿して澤山挿し込るハ雅趣ありし見忌一及び繁るるへずといふあり亦太不可瘦ハ瘦といふハ飾りかんせいすきく瘦るるもふりしきとあり多し二種三種返すハ多し挿すること一瓶子三種より數種ハ挿しつゝとあり。高低疎密如画苑布置方妙 一ハ高低疎密ハ挿花のつぎをいふ高ハ高さのつぎをいふ直ハ直のつぎをいふ布直ハ布ハ直のつぎをいふ義置ハおきくつぎの義字本の函を蓋し枝葉の出る所木等の様子花咲く所能き加減ハ布直置配りて高きトの低きトのおろしきまがらるると云密ハ二む所

直ハ直のつぎをいふ布直ハ布ハ直のつぎをいふ義置ハおきくつぎの義字本の函を蓋し枝葉の出る所木等の様子花咲く所能き加減ハ布直置配りて高きトの低きトのおろしきまがらるると云密ハ二む所

置一瓶忌兩對忌一律忌成行列  
忌以繩束縛

直ハ直のつぎをいふ布直ハ布ハ直のつぎをいふ義置ハおきくつぎの義字本の函を蓋し枝葉の出る所木等の様子花咲く所能き加減ハ布直置配りて高きトの低きトのおろしきまがらるると云密ハ二む所

凡而挿花ハ糸子とて總あり或ハ針ハぬあとを用て無体子態をつけ  
まハ針のぬく竹釘を括へ刺まハ花配の留木の腰ハ無理子園くさ  
入てさうこの窮屈するハ意一きことあり挿花の習業熟子て枝の下  
なるがゆかり実の挿花といハ瓶挿一とてちと挿入て其後出生の  
通ハ能すりて動子てゆかりとてちと水際の花も丸く一本の枝  
子挿りて花容の風流あると佳とすこれ上多の枝あり根のこまりくすと  
花のすりととととされハ出衆ぬことあり尚多ハ挿花國會ハ著く

夫花之所謂齊整者  
正以參差不倫意態  
天然如子瞻之文隨  
意斷續青蓮之詩不  
拘對偶此真齊整也

夫花之所謂齊整者正以參差不倫意態天然如子瞻之文隨  
意斷續青蓮之詩不拘對偶此真齊整也

夫花之所謂齊整者正以參差不倫意態天然如子瞻之文隨  
意斷續青蓮之詩不拘對偶此真齊整也

論意態天然 六參差ハ參ハまじさる差ハあやぐといふ字ありこれハ  
侍従の字まで長き短き相雜りて等しくさるをいふなり不倫ハ備ハ  
ひとと注して不備ハひととらすこと事これハ長き短き品々相雜り  
ひととらすといふこと譬ハ字本の枝葉は色々の名をつけてこれハ斯セぬハ  
あるぬもの此花ハ斯ハ葉がかけられぬあやぐ窮屈は程屈をつけてる  
挿花あり或ハ此節あ節とありさるものなり其の挿花ハ後ハ  
左様のことまでハか一是ハ本の枝葉字の出生の葉ありは故て地上之生  
出さる産の儘まで挿る其態能齊整はするところありこれを長き  
短き品々相雜りて等しくさる同くす其節を削ぬといふものありさ  
れハ字本同物を裁紙挿りても同態ハ出衆ぬものなり是真の挿花の  
風意あり意態ハ意ハちちちあり態ハ枝の姿の鷓しきことあり意  
態ハ熟字して意態姿態の麗しきことあり以天然ハ天然自  
然なるをいふなりといふことあり此去意ハ前ハぬく花を挿るハ大驚  
驚くす太やく瘦うさす高き所低き所ありて疎まばるる所密て  
こむ所ありて盡人の面を蓋地取の布蓋のごとくみするありされども  
又是亦も多程其適はせぬハぬといふ窮屈あることハわす  
又花之所謂齊整といハ能くこの揃といふ者ハ參差とて不備とて

長き極き品と相変て同じく等々すなりて意は思枝の姿態の麗き  
 ことも皆自然自然として其本態も其子の出生の質を倣て自然の  
 態を神るとして倣とするなり是を齊整て能掬とハハなりけ殿挿花  
 の深意より深き效のあることなり尚妻ハ挿花圖會は思合ハ  
 ○ぬ子瞻之文隨意後青蓮之詩不拘對偶此真齊整也  
 とハ子瞻ハ蘇軾が東坡先生のことなり東坡先生天性文章子  
 名譽高く我が意は出る倣子作る父の影倣自らありて妙所は  
 けることなり是文法がそつすなり能齊整あり是が真の文章あり  
 却り文法は拘りとりふことなり青蓮ハ李白が詩あり字太白詩を  
 青蓮居士といひたり其李白が賦る詩ハ對偶は拘す詩の對句は  
 敢て貪着せざりたり然る天然其體齊整ことこのひとありて  
 妙境は至りたりこれ真の詩なり却り詩趣は獨りたりなり  
 此去意ハ文挿花の書藝のことなりハ正は參差なり不倫意態天然  
 自然あると案と一無理あることとせず我意の俣せすなり其本子の  
 出生の質を倣て自然の俣を掣成時ハ因花因字何能掣並ても  
 同ハ態ハ出乘ぬものなり能令ハ子瞻が父の意は倣て作り能後ハ青蓮  
 が詩の對偶は拘すなり詩法のしく齊整あり是真の齊整ありとあり

若夫枝葉相當紅白  
 相配此省曹墀下樹  
 墓門華表也惡得為  
 齊整哉

若夫枝葉相當紅白相配此省  
 曹墀下樹墓門華表也惡得為  
 齊整哉

善文枝葉相當紅白相配此省曹墀下樹墓門華表也惡得為齊整  
 哉と枝葉ハ枝ハさなり葉ハさなり相配ハ両方より相互に向當こと  
 ことあり紅白相配ハ紅ハ赤一白ハ白一相配ハ赤き花と白き花と  
 相互に匹敵向合なり事あり此省曹墀下樹墓門華表也ハ省曹ハ  
 主官の役所なり墀ハ下樹ハ其後所の遊のき  
 階のむと事也樹ハ植木の事なり其後所の遊の階のむと事ハ  
 造り本を控へかく肌り能ハ此邦の芸震殿の控階の左右ハ右邊の楠  
 左邊の櫻あること一墓門華表ハ墓門ハ墓所の門なり華表ハ  
 色ハ彩色彫物ある柱のことなり都而中華ハ神社佛閣の入口等  
 此相建てあるなり此方の鳥居ハ遊も定同ハ親のものなり爰ハ彼の  
 墓所の志ハ建てあるなりこれを華表といふなり○惡得為齊整哉

と八前子ぬめく齊整て天然自出の松樹を挿し、また紅白相互に西紀向合等しく  
兼相互に向あり両方一同し松子立並ひ又紅白相互に西紀向合等しく  
省曹の紋所の障子の造り樹の造り或ハ墓門の華表の臺あるの  
ぬまありてハ甚見悪し思を齊整とこのひさかちを待て凌向  
齊整とる美の挿花の紋飾を爲さるべきあり師傳子挿花を挿の  
事おれと挿花圖會は妻しく著しくハ繕りて妻子畧しぬ

六屏俗

室中天然几一藤床  
一几宜潤厚宜細滑  
凡本地邊欄漆卓描  
金螺鈿床及彩花瓶  
架之類皆置不用

六屏俗

室中天然几一藤床一几宜潤  
厚宜細滑凡本地邊欄漆卓描  
金螺鈿床及彩花瓶架之類皆  
置不用

屏俗ハ八屏ハありければと  
譯俗ハハヤキことあり卑く拙きことを退けさるべきあり挿花を好の輩  
其席は用る道具皆風流しく雅ものを備へておく過美あるものハはかり

皆屏並べずといふ事あり。室中天然几一藤床一几宜潤厚宜  
細滑ハ室中ハ室ハといふ字より家の中といふことあり天然几一几ハ  
つこのことあり是ハ天然自出の本地の几と云ふことあり藤床一ハ藤ハふ  
かり床ハせうきあり腰掛あり藤蔓あり造る腰掛あり一ハ文章の  
幾かりいづくも限るべしすされども飾り澤山も雅なるべしす  
是ハ前子も序文の中にもいふごとく中華ハ家の内ハ床と云ふす疊と敷  
す皆去間敷瓦あり人ハ立て居る禮あり打らるべき滑る時ハ床几ハ腰を掛て  
居たりを事等の時ハ腰を掛て居ることあり因而一人ハ一几床几と疊  
こゝより及子挿花もつこの上子並べことあり凡ハ潤厚ある子宜ハ細ハ  
ひろくおひかりと云事厚ハおつくおやふかりと云夏花を並べハ廣く大ハ  
厚く丈夫あるが宜とあり又細滑ある子宜とハ細ハこまるといふこと本の本目  
のこまるとあると滑ハおめらうとすべしこゝより本目細ハ滑と云  
奇麗子もやハ思ゆるそ宜とあり何れ花を並べハ尤く過麗あるものハ  
嫌ことあり如何にも質朴ハ志こまりて雅を見ゆると傳へするありは幾も因  
て今此邦も七架雲齋初て唐几の形を慕て花臺と云ふものを採用する  
是ハ本朝花臺の権輿あり。凡本地邊欄漆卓描金螺鈿床及彩  
花瓶架之類皆置不用ハ本地ハ其挿花を並べ所と指し本朝と云ふ

通欄とハ通ハカたりといふ字なりといふもろ欄ハ様手なり様手欄干をつけ  
こる几有り漆卓とハ漆ハうるま法こるを卓ハあやかりやちりつこ  
るを几有り漆金ハ描ハまんとといふ字も金薄きて蔭繪とあるも  
螺鈿ハ貝のこも鈿ハ字書子以空飾器謂之鈿と注して珠玉とハ器物を  
鏤飾とあるも有り後より螺鈿ハ青貝等にて飾る卓や床几の事と  
いふ有り粉花とハ唐字等の花形様子を蔭繪とあるものも去瓶架と  
ハ押花の執器を壺架なり新様ハ花菱麗のちちやうあるものハ依物  
して風雅ハ好ぬもの有り因る斯の形様様蓋て用すといふも有り是  
押花を好者使すも用づらす尚委ハ押花圖會ニ著せり

七花崇

花下不宜焚香猶茶  
中不宜置果也夫茶  
有真味非甘苦也花  
有真香非烟燎也

七花崇

花下不宜焚香猶茶中不宜置  
果也夫茶有真味非甘苦也花  
有真香非烟燎也

花崇とハ花を崇めるものを花の爲に崇といふて越て嫌こ有り崇ハ  
こり字あり○花下不宜焚香猶茶中不宜置果也とハ花の下に  
を焚へず宜うざるあり凡そ香氣ハ大に花の白ひを奪りゆ有り  
於茶席中に果を置へざるありと有り果ハ木の葉なりと有り  
茶菓子に密相梨此西凡等ののひののハ出すことせざるがごと  
と奪ひて茶菓子はハ應るざるあり是則花下は葉を置くハ果を茶の  
に取は出すと同しと有り○又茶有真味非甘苦也とハ  
葉ハまこと味ハあつたり甘ハあまき苦ハあまき茶ハ葉の格別の  
味あり甘も苦もあつたり○花有真香非烟燎也とハ眞ハま  
ことまハ白ひ烟ハけり燎ハてらすことと有り○刻字ハ焚まるとの白ひ  
のこ有りこれ花ハ天然其葉質の白ひ有て焚物等のこ有り白ひ  
非すと去夏有り改は花下は葉を置く夏を忌烟燎とけり集すのことハ  
花の葉を奪のこ有り枯萎がむの熱有り因るこれを花崇といふ有り

味奪香損俗子之過  
且香氣燥烈一被其  
毒旋即枯萎故香為

味奪香損俗子之過且香氣燥  
烈一被其毒旋即枯萎故香為

花之劍又捧香合香  
尤不可用以中有麝  
臍故也

花之劍又捧香合香尤不可用  
以中有麝臍故也

味奪去按俗子之過也八味奪也八條のまの風味を果本の寒等子  
奪るといふことあり多按とハ多ハ花のまの白ひあり花のハ多ハ焚多と  
燎ハ其多まて花のまを按するといふことありこれハ是依子の過あり  
といふことあり依子ハ凡俗の魚人のことあり愚ある人の癖ハ是事を仕過  
却る天然の風流雅趣と失ものあり。且多氣燥烈一被其毒按  
中 括姜とハ且とハまことハ義其まもといふことあり多氣ハ焚く其の  
ことあり燥烈とハ燥ハうこすといふ字烈ハせきといふ字あり一被  
其毒とハ少まても其燥烈の烟まを花子被まといふこと被まけれ  
ハといふことあり按即とハ按とハやといふ義即ハ即時といふことあり  
此去意ハ味奪多按ハ依子の魚人の仕過す所よりあり且又其上  
子焚もの多ハ燥烈といふかうすの烈きが按ハ花の為ハ大毒ありと  
いふことあり姜一其毒をうけれハ按てやすかち即時子括姜とあり  
故ハ多為花之劍又とハ劍ハつるぎ又ハやいをかり故ハ多ハ花の為ハ劍女の

如くありといふなり持去合多不可用以中有麝臍故也とハ按多とハ  
線多あり合多ハあま多あり線多あり此多を用へうすことあり麝臍ハ  
麝香の多とあり麝といふ獸の臍なり此多も烟も花の為ハ毒あり持去  
合多の中ハ麝多を加ふる故線多はあまといふことあり

昔韓熙載謂木犀宜  
龍腦醑醑宜沈水蘭  
宜四絶合笑宜麝薝  
蒲宜檀此無異笋中  
夾肉官庖排當所為  
非雅士事也

昔韓熙載謂とハ韓熙載ハ五代の時の人なり故ハ中郎の時より鑑れハ  
昔より謂とハ其韓熙載といふことあり木犀ハ宜龍腦とハ木  
樨の花ハ龍腦の白ひを合るなり草とあり除礫ハ宜沈水とハ除礫の花  
子ハ沈水の多を灌ぐハ宜とあり蘭ハ宜に絶とハ紫の花ハ四絶まを  
合へ宜とあり合笑ハ宜麝とハ合笑花子ハ麝まの白ひと合て宜と  
かり麝薝ハ宜檀とハ麝薝の花ハ白檀の白ひを合せるハ宜とあり是







挿かすべし則日新花の神彩を養ひ光潤をまじ性命を延ばしめ  
ふとかり及み此是を洗沐の法とするあり

夫南威青琴不膏粉  
不擗澤不可以為姣

夫南威青琴不膏粉不擗澤不  
可以為姣

不可為姣とハ姣ハありと訓て姦きあり容心の美きことあり意ハ是レ  
南威や青琴等の挿か美女までも膏をほけず粉をつけず挿髪も  
結す沐浴洗ふす潤澤あくこれる候よりさうして居るときハ旬其  
容止の美麗を失て美女とも稱しごとく姣とも為つべしとハ花も  
其通きて何程も花ありとも埃がけおごけおこされて居てハ名花と花  
も住のりよりす因る程日は一度づ洗沐をきて潤澤を失はせぬす  
光を照しめお花を垢れ洗ふす潤澤あくこれる候よりさうして居るときハ旬其  
られおふもこのろちちあるをといひことあり

今按て總而皆花を美人美女子微令て野山の草木を取て室中  
挿花とて飛愛潤すす夫南威青琴の如き美女までも膏粉挿  
澤せしむ候もさく候もせずして無藝無能なり行儀作法もさ  
かへ美女美人とも為へくす又肌飾りとも凡俗下品なり鼻きお  
りさなる何とて高位貴人の寵愛と為へんや是即花も因  
りて多野山に生さる草木を其候までこれが生るありとて高  
位貴人の室上の床の間へ居らるべきや又雲舟の西越子昂の書かど  
の懸幅と相對すべきや及み洗沐して淫澤せしめ意き所のことき  
ものを去嫌てをむけざるをこの直し塵き姿粧をさしめいさ上品  
して瓶中のたまりおく一俵のすりおきや居すまへの行儀を躰け  
雅正名画各華等の鏡子と對する候も挿てこそ高貴の人の貴  
候とも得べきことあり然と無理なる處をけ凡俗の舟き風俗と  
さきめ瓶中のたまり意しき作法も居候の候も挿かしてハ何  
とての貴候とも寵愛とも為へべきやこれ挿花といふべしこれハ  
皆技藝の稽古の習候もある候も尚妻挿花國會はこれハ茲に  
今以數葉殘芳垢面  
今以數葉殘芳垢面穢膚無刺



澹雲薄日夕陽佳月花之曉也狂號連雨  
 のみく潤て多本と育こ乳汁まで兜をまらぬこれと即膏雨とハ  
 りふかりは意ハ多花より喜とき思とき澹とき霧とき曉夕の夕刻有  
 て洗て能き時ありて意き時あり其洗て能時を起て湯を湯と得其時  
 候とのみ其時を候得るより其時を候得る湯ハ其水乃為膏雨  
 これ花の為ハおふのこく潤おめのぬくこく精を敷一精先と出  
 やそり入樹中の雨のぬくこく多本より育長根をそそちここのこく  
 量と湯花を得其候乃為膏雨とのみあり

澹雲薄日夕陽佳月花之曉也  
 狂號連雨烈燄濃寒花之夕也  
 唇檀烘日媚體藏風花之喜也  
 暈酣神斂烟色迷離花之愁也  
 歌枝困檻如不勝風

花之夢也  
 嫣然流眄  
 先華溢目  
 花之醒也

嫣然流眄  
 光華溢目  
 花之醒也

雲の薄とい薄日とハ薄日とて空子薄雲瀝りて日光遠きとい夕  
 陽とハ日暎日に入る時をい佳月ハ皎月夜といふこかり此四の時分  
 ハ皆花の爲ハ曉よりおつきてハ夜の明方のこかり○狂號連雨烈  
 燄濃寒花之夕也狂號ハ大風の吹狂號といふ連雨ハ毎日降續く  
 雨をい連とハ連日といふこ十日後も降續く雨をいといふ烈燄といハ  
 烈く燃かぬき曇をい濃寒ハ濃寒氣といふこ冬寒寒氣甚也  
 暈酣神斂之時ハ花之爲ハ夕より夕の爲方のことかり○唇檀烘  
 白媚體藏風花之喜也ハ唇ハくちびろ檀ハ赤き木ありこれハ花の  
 葩の輝かすといひりと白ひ等ありて赤きといふ唇ハ唇とて唇檀と  
 といかり烘日とハ烘ハうやと漢字これ其葩の薄くひくと唇の換ハ  
 赤やんある日と烘て赤ハやく白ハ赤くは用くと麗きといふかり媚體  
 藏風とハ媚ハさびあめくといふ字體ハすくかり藏ハおさむるかり花の  
 色艶ありて媚さめめきといふ體の麗きは徐まるといふ風とふくま  
 葩のひりここの愛らしき育根ハ何れも花のこの喜るべし

暈明神飲烟色迷離花之愁也ハ暈八月のうさ帯るるつきうさと  
 暈とハ明ハ酒とのしんて酒けちさ己も不ふと明とハ神飲ハ神ハ花  
 の精を以て飲ハ花の神おさまりて教せず蔵かめハ烟色迷離ハ  
 烟色ハ花の色光澤を以て迷離ハ迷ハまよふとハむ字離ハ  
 さまよふことハこととて花の烟色の香も迷ひ離る候子こゆるかり  
 乱とハ意あり是ハ月暈を帯て光輝の薄うめく花も落き色  
 さめて勢なく又入るハ酒明中へ酔い生体さきめくうらりとハ神  
 飲蔵て深るるめくまて花の烟色光も迷ひ離れて酒さくはやくとせ  
 すハとておそれる候ふるハこれ花の愁すくさり是ハ想まいまこ水と揚うね  
 る趣ありハ秋枝困極め不勝風花之夢也ハ秋ハそハらとハ字枝  
 ハ條ありそらとて高き枝といふこと困極ハ極ハとハ字字て垣のこ  
 こかり風御等子牆と結ハと風極といふ依うきねといふがめハとて  
 ハ庭園等の字本の高く秋なる枝が極等ハゆひこまれる或ハ墮られ  
 るといハ困窮なる枝の如きといふ不勝風とハ其極をよ結てなれて  
 ある枝の困窮ハ秋て高枝ハ風等ハあつとハ忽打んとするが如き其  
 形弱柔といふと風も揚るが如きと云ふりこれ花の意ハ夢とて  
 心意あり是ハ水と揚うねもあけそをいハ得と本意ハ水とあけつて

勢薄きがめくお不ゆるかりハ總て梅花ハ伐花可て根を離れまて天  
 地雨露の表を離水の精力いとの育かり故ハ兆さるの趣すて夢  
 意最かりされども前ハ去ぬハ梅中の雨水と傍亦ハ氣と深く受る  
 花瓶ハ能く表時ハ花の精色格別すてやそり根の育りめく園を  
 連すて故とて薄ハ瓶の中を空を結かめく去りてこれ花の性命を延る  
 去かり然るも葉候もいまい其時をさる枝條苔を止めたまさると室  
 中ハ入て花を潤する等夢中ハ夢をこるこちからんう去々のこちす  
 室中の暖ある所より取出て俄ハ寒風ハ充る故ハ再はるる花再ハ  
 去不れて故ハ夢中ハ愁を抱く心意あるハ密ハ櫻園傍花と梅枝  
 去も去るらんう憐へきことあり尚委ハ挿花園會と照ハ鏡る  
 ○媽然流眇光華溢目花之醒也ハ媽然とハ楚辭の文字とて美  
 女の子つりと笑姿を以て流眇ハ流ハ流ハ目とハ流ハ目とて流目とて  
 尻目とつよといふこれありこれハ美人の態とするといふ兒かり光華ハ  
 花のつやきりといふ露と持てる候子こゆるかり溢目ハ其花の艶が  
 きらりとて光の目におまる候子こゆると云ふり是ハ花の精神溢る  
 いきとてハ譬ハ美女の媚をまめきて粧ハ飾てまこくと云ふ尻目  
 流目等といふ色めく横ハ花の露ハ艶光ハ目ハ飾りまハゆきかといふ

美く三ゆる是花の盛るるあり花の落覺るる時とあり

曉則空亭大厦昏則  
曲房奥室愁則屏氣  
危坐喜則謹呼調笑  
夢則垂簾下幃醒則  
分膏理澤所以悅其  
性情時其起居也

曉則空亭大厦昏則曲房奥室  
愁則屏氣危坐喜則謹呼調笑  
夢則垂簾下幃醒則分膏理澤  
所以悅其性情時其起居也

是ハ花の爲子曉あるときハこのことあり空ハうちひけること亭ハちん空  
浦等の様を維ゆる小空敷のこのことあり大厦ハ家あり大きき家の  
廣き空敷等のこのことあり是前子去澄雲薄日夕陽佳月ハ花の曉也  
左様の時ハ空亭とてうちひける雜坐浦等々大きき家の夏の廣き  
坐浦等々盡くふことあり○昏則坐房奥室とハ坐房とハ坐ハまが  
るといふ字房ハつねと云こゝまで都座のこのことあり坐房ハ狭くひそるる  
部屋といふことあり奥室とハ室ハ妻家う坐浦あり是ハ奥深りき  
裏坐浦かと云こゝとあり是前子去狂舞連雨烈能濃寒花之夕

也と左様の時ハ坐房とてまがり廻りて狭くひそるる部屋の様を所々  
奥深き妻家の裏坐敷等の様を所々盡くふことあり○愁則屏氣  
危坐とハ屏ハまりをけるといふ字もて氣と屏といふこと氣と屏るとハ息と  
して居ると大意危坐とハ此とかこまりて居ることあり前子去所の暈酣  
祇歛相色迷離花之愁也とありて左様の時ハ危坐て此とかこまり  
居て房氣と名とて居て花子まどつけぬかと云こゝとあり是れ愁則花の  
いま水と揚す弱りて居時それハ先水とよく揚までそつてまどつけず  
おが能なり○喜則謹呼調笑とハ謹呼ハかまひすゝゝあびとて  
歛ハ味ふの意なり調笑ハ和氣戲て其優のそろあり是前子去唇  
種炫白媚體藏風花之喜也とありて左様の時ハ和暢戲て喜び  
安樂べとあり○夢則垂簾下幃とハ簾ハこすありすれあり  
幃ハのれんかり幕張のいありこれ前子去教技困盤也ハ不勝風  
花之夢也とありて左様の時ハ簾と垂すれと懸或ハ幃とてのれん  
幕張のもの下げて静みて盡くふことあり是前子去水と揚るるも  
いま湯とせぬゆ一能く水と揚て勢よくあるまで風のさぬ候まで静  
みして盡くふことあり○醒則分膏理澤とハ膏ハあか潤と  
いふ字あり分とハひと子あふるといふことあり澤ハ前子も云理澤とて

潤て色艶と嬌の義あり理ハあるの義あり是前子出嬌  
 然流野光華溢目花之眩也とありて此趣は媚まきまきで潤くはき  
 ど一色艶光澤とあり同はあまのまはゆき程なれは自ら其膏の如  
 潤もまきまきひくは分興て色艶の潤もまきまきく飲て自ら一き有  
 授かり。所以以悦其性情時中其喜居也とハ性ハ花の生質精  
 と去憂情ハ花のそろきあり居居とハ其寐起することあり是前子  
 去めく花も時々其曉昏愁喜夢醒の分別ありて能其時と候  
 得て笑くの色入とて養育すれハ其花の性の情を悦めて其  
 悲居を時する所以あり其花の想通すて喜と云いられありと去憂也  
 浴曉者上也浴寐者  
 次也浴喜者下也若  
 夫浴夕浴愁真花刑  
 耳又何取焉

浴曉者上也浴寐者次也浴喜者下也とハ浴することあり  
 前子出めく花の曉とて寐る時と喜時とありて其曉方の時と

浴曉者上也浴寐者次也浴喜者下也若夫浴夕浴愁真花刑耳又何取焉

浴者ハ上也寐る時を浴者ハ次也喜時を浴者ハ下也是前子花の  
 喜時寐時曉夕と能分別て必ず又ハ曉の末子浴の法を出して  
 花を洗ことと妻す前後の文章と能く見合考へて花の性情を  
 察すべき者ありされハ澄雲薄日夕陽佳月花之曉也とありて曉  
 時ハ空亭大厦子置へるといふは是其時節と浴法とさくくそ  
 如何も花のそろちち先澤潤を踏へく尚性命と延つて  
 入眺も深うらんか。寐を俗者若ハ次也と寐ハ夢時あり枝園  
 猶も不勝風花之夢也と夢時ハ垂簾下幃とあり是ハ前子解  
 めく水と揚る夏ハ揚るがうさか。揚損ひていま。得と極まはぬ  
 風情あり固る能水とあげおせ極象の能整まで簾等を懸又ハ  
 幃を下く風のわぬ様も多あとして盡く候とあり箇候の時  
 洗ハ住くす然ともわと去昏時と愁時と浴より頗る住まこと  
 寐を浴する若ハ次也といふあり喜を浴する若ハ下也と喜ハ花の  
 喜時ハ濯呼潤笑すとありて媛媛て居ふとありけ授かる時ハ花と  
 浴ハさるり浴ハすは撥て盡ハ増ふれども住くすことあり故は喜を



浴者ハ巾也ハ巾也と銘あり。浴ハ浴ハ浴ハ浴也。然ハ然真ハ真花ハ花刑ハ刑身ハ身又ハ又何ハ何取ハ取馬ハ馬  
とハ夕ハ夕ハ暮ハ暮時ハ時あり。狂ハ狂婦ハ婦連ハ連雨ハ雨烈ハ烈能ハ能濃ハ濃寒ハ寒花ハ花之ハ之夕ハ夕也。右ハ右其ハ其昏ハ昏時ハ時ハ  
此ハ此房ハ房眞ハ眞室ハ室とあり。箇ハ箇枝ハ枝の時ハ時ハ眞ハ眞深ハ深きハ深くハ深空ハ空敷ハ敷うハ敷圍ハ圍つハ圍めハ圍るハ圍部ハ部を  
杖ハ杖のハ杖所ハ所一ハ一垂ハ垂へハ垂きハ垂たりハ垂又ハ又慈ハ慈とハ慈きハ慈ハハ慈暈ハ暈神ハ神飲ハ飲烟ハ烟色ハ色逆ハ逆難ハ難花ハ花之ハ之  
慈ハ慈也ハ慈慈ハ慈則ハ則房ハ房氣ハ氣危ハ危望ハ望とあり。箇ハ箇枝ハ枝の時ハ時ハ此ハ此とハ此息ハ息止ハ止てハ止くハ止こハ止まり  
居ハ居てハ居花ハ花子ハ子まハ子とハ子つハ子けハ子ずハ子垂ハ垂けハ垂候ハ候とあり。これハ此いハ此まハ此こハ此一ハ一向ハ向水ハ水とハ水揚ハ揚清ハ清とハ清弱ハ弱  
屋ハ屋者ハ屋時ハ時されハ時バハ時かりハ時善ハ善大ハ善枝ハ枝の時ハ時浴ハ浴をハ浴しハ浴てハ浴ハハ浴基ハ基花ハ花のハ花腦ハ腦とハ腦かりハ腦花ハ花のハ花為ハ為  
大ハ大害ハ大あるハ大とハ大かりハ大因ハ因るハ因夕ハ夕とハ夕浴ハ浴慈ハ慈とハ慈浴ハ浴すハ慈がハ慈ぬハ慈きハ慈ハハ慈真ハ真花ハ花刑ハ刑身ハ身眞ハ眞ハ  
まハまこハまくハま漢ハ漢字ハ漢刑ハ刑ハハ刑罰ハ罰のハ罰刑ハ刑まハ刑えハ刑つハ刑こハ刑すハ刑こハ刑まハ刑すハ刑こハ刑割ハ割てハ割右ハ右体ハ体慈ハ慈時ハ時夕ハ夕  
時ハ時とハ時浴ハ浴ぬハ時きハ時ハハ時眞ハ真子ハ子花ハ花をハ子つハ子こハ子すハ子るハ子こハ子こハ子くハ子刑ハ刑うハ刑こハ刑こハ刑とハ刑ありハ刑又ハ又何ハ何取ハ取馬ハ馬  
こハこハハこ枝ハ枝あるハこ花ハ花子ハ子害ハ子あるハ子こハ子ハハ子又ハ又何ハ何取ハ取んハ取どハ取りハ取もハ取ちハ取いハ取ぬハ取こハ取いハ取こハ取とハ取あり

浴之法用泉甘而清者細微澆注如微雨解醒清露潤甲不可以手觸花及指尖折剔亦不可付之庸奴猥婢

浴之法用泉甘而清者細微澆注如微雨解醒清露潤甲不可以手觸花及指尖折剔亦不可付之庸奴猥婢

浴之法用泉甘而清者ハ浴とハ浴ハハ浴浴ハ浴するハ浴とハ浴ハハ浴洗ハ洗こハ洗こハ洗花ハ花をハ花洗ハ洗のハ洗法ハ法ありハ洗こハ洗れハ洗ハ  
浴ハ浴とハ浴こハ浴さハ浴ふハ浴とハ浴急ハ急とハ急敷ハ敷浴ハ浴こハ浴こハ浴まハ浴ハハ浴非ハ非ずハ非とハ非霧ハ霧とハ霧そハ霧きハ霧掛ハ掛るハ掛こハ掛こハ掛ありハ掛委  
柔ハ柔箇ハ柔條ハ柔ハハ柔紀ハ柔りハ柔泉ハ泉甘ハ甘而ハ甘とハ甘ハハ甘泉ハ泉ハハ甘湧ハ湧出ハ湧るハ湧水ハ水とハ水水ハ水のハ水最ハ水上ハ水清ハ清きハ水も  
のハのありハの瀑ハ瀑布ハ瀑清ハ清水ハ水等ハ水のハ水こハ水とハ水ありハ水然ハ然こハ然湧ハ湧出ハ湧るハ湧水ハ水もハ水其ハ其地ハ地のハ地脈ハ脈芝  
ハハの因ハのてハの苦ハの水ハのもハの鹹ハのきハの水ハのもハのありハの其ハ其泉ハ泉とハ泉雖ハ雖急ハ急きハ急かりハ急されハ急ハハ急こハ急泉ハ泉甘  
ハハのこハのとハのハハの熱ハのくハの苦ハの水ハの最ハの上ハの清ハのきハのとハの帯ハのもハののハのありハの甘ハの水ハのハハの監ハの氣ハのもハのありハのまハのり  
洪ハ洪もハ洪ありハ洪まハ洪りハ洪水ハ水のハ水極ハ水上ハ水ありハ水まハ水其ハ其上ハ上清ハ清きハ上者ハ上とハ上用ハ上てハ上こハ上いハ上りハ上あり  
此ハ此清ハ清きハ清とハ清熱ハ熱りハ熱ハハ熱尋ハ尋常ハ尋のハ尋清ハ清きハ尋とハ尋去ハ尋ハハ尋非ハ非ずハ非味ハ味甘ハ甘和ハ和柔ハ柔ハハ和少ハ少もハ少酒ハ酒氣  
香ハ香くハ香極ハ極上ハ極のハ極清ハ清涼ハ涼水ハ水とハ水用ハ水うハ水こハ水かりハ水者ハ水四ハ四章ハ章擇ハ擇水ハ水のハ水条ハ条ハハ水花ハ花とハ花擇ハ擇  
畏ハ畏水ハ水とハ水擇ハ擇べきハ水こハ水とハ水瓶ハ瓶垂ハ垂りハ垂されハ垂こハ垂もハ垂けハ垂浴ハ浴水ハ水ハハ浴別ハ別るハ別水ハ水のハ水極ハ水上ハ水とハ水冷  
味ハ味せハ味ぬハ味ハハ味ありハ味ぬハ味こハ味こハ味ゆハ味ハハ味浴ハ浴法ハ法とハ法別ハ別糸ハ糸ハハ別こハ別りハ別書ハ書出ハ書こハ書こハ書ありハ書泉ハ泉甘  
ハハのこハのとハの瓶ハのけハの上ハの清ハのきハのとハの用ハのてハの此ハ此とハ此瓶ハ瓶者ハ瓶こハ瓶こハ瓶何ハ何ハハ瓶こハ瓶倍ハ倍構ハ構あるハ倍  
水ハ水とハ水こハ水りハ水冷ハ冷凍ハ凍せハ冷よハ冷とハ冷ハハ冷夏ハ夏ありハ冷○細ハ細微ハ微澆ハ澆注ハ注如ハ注微ハ注雨ハ注解ハ解醒ハ醒清ハ清露ハ露潤ハ潤甲ハ甲不ハ甲可ハ甲  
洞ハ洞甲ハ甲とハ甲ハハ甲細ハ細ハハ甲こハ甲まハ甲りハ甲きハ甲もハ甲のハ甲こハ甲まハ甲りハ甲きハ甲とハ甲細ハ細とハ細細ハ細とハ細出ハ細ハハ細入ハ細りハ細すハ細こハ細こハ細とハ細出ハ細  
こハここハこ澆ハ澆ハハこうハこすハこくハこすハここハことハこハハこ意ハ意注ハ注ハハ意うハ意もハ意ひハ意そハ意くハ意こハ意ハハ意夏ハ夏ありハ意こハ意れハ意清ハ清きハ意  
泉ハ泉水ハ水とハ水微ハ微ハハ水細ハ細ハハ水こハ水りハ水薄ハ薄くハ薄潤ハ潤ひハ潤灌ハ灌きハ潤すハ潤こハ潤こハ潤とハ潤こハ潤こハ潤ありハ潤微ハ微雨ハ雨とハ雨ハ  
玉ハ玉とハ玉微ハ微ハハ玉細ハ細きハ玉雨ハ雨のハ雨降ハ降とハ雨もハ雨三ハ三こハ三りハ三すハ三こハ三りハ三もハ三のハ三濡ハ濡潤ハ潤るハ濡とハ濡微ハ微雨ハ雨とハ雨去ハ雨あり

俗に粉掃雨と云ふもの是なり解醒と八醒ハさめる。醉さのくと割て酒  
の醉ささすすといふ字ありこれハ譬ハ酒に酔ふ時風子あり粉  
掃雨等濡て涼く覺れハさち能次あり解醒と云ふは  
これを微雨醒を解といふなり。如清露潤甲と清露ハ清き露  
といふことこれハこそ露狂清きものハあり。夜露降て字月潤澤と灌  
冬ハ其露凍氷て霜とあるこれハ天ハ陽ハて風有て乾一地ハ陰  
して去氣ありてある夜陰月の水の陰氣とありて露多し。この  
露の清きことまじ少の濁もさくまほけもさく澄きりて細ありて  
は上もさき清きものなり。露子甘露等とて凡て露ハ甘ありて清く  
清きこと露もさくものなり。雨も亦其ぬる露雨又五月頃の入梅の雨  
皆陰氣の梅より清清子澄白て甘味あり。和柔これ字亦と  
畏のものもさきされハ字亦ハ雨露の乳汁子育られハ花咲美と結と  
去り固る露ハ微雨醒と解清露甲と潤々如す。とあり甲と潤  
とハ甲ハ芽出のころあり芽出と露の潤とと甲と潤といふあり  
呉豫徳錡花譜曰挿花之水類有小毒須旦之換之花乃可  
久若兩三日不換花輒零落錡花每至夜間直挿至風處露  
之可觀數日此天也入春之術也云々

此吳豫徳文即前章述る經日一夜花を俗の類あり毎日  
新水と換て夜ハ風のおぬ所一盞盞と更て天地の露を  
洒れハ天と入と参の術ありとあり今如斯時ハ花の水ハ皂角換て  
花と書へきことあり若一夜挿て其後換盞二三日と経ハ水も替へ  
かり花も埃さけ替へけはかり花の爲ハ元より悪く看入も亦  
疎く花も風雅殺風葉より挿花と媛む者ハ能く信へきことあり  
○備も花と滋之法といハ根子水と掛蓋敷浴こもわす。前章洗沐と書  
洗注水雨のこもり濡てをり盞こもわす。前章洗沐と書  
又浴と書る文字は意を注け。洗ハもの洗といふ字沐ハ髪を洗  
といふ字あり浴ハ湯とわびること。人のゆわこ。垢と洗の別  
あり備も垢面搽膚刺飾の工ありて。書る事あり。譬ハ今  
山茶等の影葉のすべく。て艶あるものと磨葉といふこれと挿花  
て二日も盞て視るは葉上ハ埃塵が。まかりて。美白。ある其こも木  
も花も埃か。こまるかり。然れども葉ハ艶ある磨葉也。其埃。視れども  
艶。かり。る塵ハ視へず。されども其埃塵。のめられて。自然。花の艶  
衰。極氣も精神も弱りて。つら。かり。是と塵去の質。任ハ枯葉  
立。五といふ。かり。改。花ハ。経日一夜。つ。浴。ねハ。あり。ぬ。あり。然れども。是



按子表申郎先生挿花を好者す夏大方あらず此を愛るの  
執心深きかゆり花を取扱夏を他は去付す自致に致されハ風流  
しをちかれども何ぞ凡庸の奴隷雜の婢女等の夏を斯事敷書  
一抱て后代は傳へきやこれ此ハ同好の朋友打寄て挿花を賞玩す  
其同好の朋友は余えんが為かり今此邦までも立内を思ふは皆この  
熱の夏のみかり是去意ハ萬事あつきて氣の充満といふことありこの  
氣の満といふことハ萬道皆同く夏まで平常朝夕の事あつても氣  
が満されハ用子立す譬ハ手習とする者筆の鋒の先までも眼を付  
心意を止て一字一畫一點といふも神精充ほきねハ善書の名を得  
夏猶一又鐵炮を習者丸筒より出ていふ行て何成所一中なるそと  
云事と見定る程あやハ宜くすと承ぬ先射入飛鳥と射落し或ハ二  
間四方の家まで三間の鎗とつふもこれ皆其隅くまで氣の充満がゆ  
かり技藝の感能ある皆氣の満がゆかり是ハ朝夕坐禪と掃除  
するも帯の先の塵埃ぬ何換子飛行て何處て落着くと能く  
見屋て扱出すものあやハ佳といふを左換子かき者と雜者扱逐  
者と云かり花と挿る者尚又けぬくま挿は舞ても掃除もろく子  
せず花巻の下紙の内水中杯子塵埃が殘或ハ紙器の傾きたるも

水の不滿あるも構ず其意くハ挿る花も拙く骨ざりし思て醜拙き  
ものかり是と凡庸奴の扱逐者雜婢女のそんさい下女子譬て云かり  
致は挿花ハ紙中より梢の細葉までも悉皆蔵て見ざる所なり  
あしく眼目と止意と用て密ある所疎ある所までも氣満と意充  
とハ云かり然ハ此花と浴も少の葉先を肥細葉の先までも氣と止  
意を止て前よ去塵埃の能流流仕舞やて意寛く水と細嫩は注て  
洗洗べ一是と氣の満ると云ものま挿花と香の肝要あるべし

浴梅宜隱士浴海棠	浴梅宜隱士浴海棠
宜韻致客浴牡丹芍	宜韻致客浴牡丹芍
藥宜靚粧妙女浴榴	藥宜靚粧妙女浴榴
宜艷色婢浴木樨宜	宜艷色婢浴木樨宜
清慧兒浴蓮宜嬌媚	清慧兒浴蓮宜嬌媚
妾浴菊宜好古而奇	妾浴菊宜好古而奇
者浴臘梅宜清瘦僧	者浴臘梅宜清瘦僧

浴梅宜隱士浴海棠宜韻致客  
浴牡丹芍藥宜靚粧妙女浴榴  
宜艷色婢浴木樨宜清慧兒浴  
蓮宜嬌媚妾浴菊宜好古而奇  
者浴臘梅宜清瘦僧

依梅宜隱士とハ浴とハ前にも云浴とをかり粉と浴ハ隱士宜とハ



此意ハ花と活子交入の人を譬へて其字本の性質形状と明らき見ゆるものなり天地自然の造物の作所物として一様なるを更子ありされハ廣野は敗醬花のひよろしとつゆけき風情深山櫻の愛しき天地自然の態なるや其字本の性質意態の違ふる種あり然も姿の能面白挿ると挿花の上は堪能の技藝といふあり然ると地を挿てハ物とあり又楊柳と似るよふやど皆凡俗の技子俣々自然の生質の意態と異なるものなり山茶も桂も夜合も菊も同一態子挿て本字の分別もかくと姿を面白くせんとして多理子挽出て其本草の本性の意態は違ふ是非道す挿花とハ去へず紙よりなる花子美しきあり尚妻ハ挿花同字述むのかり是花と活子も其字本の意態本性と能察し其の性質子傲て活べきことあり

然寒花性不耐浴當以輕綃護之標格既稱神彩自發花之性命可延寧獨滋其光潤也哉

然寒花性不耐浴當以輕綃護之標格既稱神彩自發花之性命可延寧獨滋其光潤也哉

然寒花性不耐浴とハ寒花ハ冬の花寒氣強き時分の事あり性ハ前子も去通其性稟といふことあり不耐浴とハ活子佳しとせずと去更是之中の性の花ハ活ハ勿く氷るゆは活子耐えずと、いふあり。以輕綃護之とハ輕ハかるく薄き意緒ハ薄絹のこをかり護之べしとハ右の輕絹の輕き薄絹と活て護べしといふことあり。寒中の性の花ハ活ハ直子氷るゆは活こそハ耐えず。又輕き絹を以てこれを護くべし。綃と活くけて塵出のからぬ様は、しと字あり。標格既稱神彩自發花之性命可延寧とハ標ハこま一ひ彩ハ色どりさいきすること。神彩ハ花の精其色艶と去事。性命とハ花の命壽命と去事あり。寧獨滋其光潤也哉とハ寧とハいつそといふ意獨ハそれどりてハかといふ意あり。光ハひかり。潤ハうる。とハうるなりといふ字あり。光潤とハ其花の色つや光り潤ひと去事あり。此去意ハ前子去ぬく花子塵出かかりてハ固奪しめらるよふなり。徑白は一皮つ活葉ハ瓶水とも入換て挿かすとす。へきことあり。然寒中の花の性質ハ活ハ氷ゆるは却白活ハ耐えず。活子輕き絹をもつてこれを覆護てとすくべし。又挿る熱も活子の活入る

凡ハ一回ニ挿るニハ一ニ  
二トハ終

譬て其字本の出生の性質意態と懸言おれハ其ものくの生質  
の通其花の標格既ニ能獨ハ花の神精意慮も暢くあり色つや  
自發し其光潤を滋のそあらず寧獨いつそ其れをりや  
性命壽家も延るあるべしとあり

瓶史國字解卷之二終

瓶史國字解

徠雲齋先生註

袁中郎瓶史國字解

袁中郎流插花圖會

諸先生編著

全部十三冊

前編

瓶史國字解

插花圖會

二冊

五冊

出来

續編

瓶史國字解

插花圖會

二冊

四冊

嗣出

文治六年の...

袁中郎流插花圖會

文化六年己巳秋七月穀旦

寺町松原下ル所

勝村治右衛門

京都 富小路三条

須原屋平左衛門

心齋橋筋安堂寺町

大野木市兵衛

日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

日本橋通三町目

須原屋平助

彫工 佐脇伊三郎

書林

大坂

江戸

京中須原屋平左衛門  
京中須原屋茂兵衛  
京中須原屋平助



